

ポルトス編

——生徒会室。

銃士隊の活躍で学園を騒がせていた悪魔騒動は一件落着した。

そして、呪いを解かれ人間に戻った銃士隊は、生徒を守った英雄として讃えられ、それまで通りの学園生活を送った。

——事件解決から1年半後。卒業式前日。

アトスとアラミスから

銃士隊を引き継いだポルトスとダルタニアンは、その任務を終えようとしていた。

ダルタニアン（ふう……春なのに冷える……）

夕暮れの生徒会室は寒い寒い……）

——ボタン。

ポルトス「おう、待ったか？」

ダルタニアン「うん。」

待ちながら最後の仕事を整理してたよ。』

ポルトス「最後の仕事？」

……おっ！ これ、明日の引き継ぎの段取りか？」

ダルタニアン「うん。」

ポルトス「コンスが銃士隊の隊長かあ。ちよっと笑えるな。」

ダルタニアン「うーん、でも私が隊長に決まったとき

アトスさんとアラミスさん、笑ってたかも。」

ポルトス「全然、笑ってなかったけどな。って言うか、あーあ。」

ダルタニアン「どうしたの？」



ポルトス

「……何でオレ、隊長じゃなかったのかなあ。」

ダルタニアン

「まだ言ってるの？
もう卒業なんだから諦めようよ。」

ポルトス

「だってよー。明日の卒業式、
銃士隊長の引き継ぎが一番のメインだぞ？
何でオレがステージの下から
お前を見上げなきゃならねえんだよ。
オレの雄姿をお前に見せたかったのに。」

ダルタニアン

「……………」

ポルトス

「それもお前からコンスにだろ？
オレ、のけ者みたいじゃねえか。」

ダルタニアン

「はいはい。
じゃ、掃除も終わったし
生徒会室、閉めるよ?」

ポルトス

「あ、おい。待てよ。」

ダルタニアン

「ん?」

ポルトス

「……………」

ダルタニアン

「何?」

ポルトス

「…………この腕章、お前にやるよ。」

——バサッ。

ダルタニアン

「…………え…………?」

ポルトス

「…………あー、もう！
お前、全然知らねえんだな!」

ダルタニアン

「何が?」

ポルトス

「卒業式に好きな男の腕章をもらうとその……
なんか知らねえけど成就するんだってさ！
お前、女子の噂くらいちゃんと聞いとけよ!」

ダルタニアン 「……………」

ポルトス 「……んだよ。」

ダルタニアン 「もう成就してるから必要ないんじゃないの?」

ポルトス 「え……?」

ダルタニアン 「明日、卒業式なんだから
腕章がないと正装にならないよ?
はい、返すね。」

ポルトス 「……なら明日やるよ。
って言うつか貰え!」

ダルタニアン 「う、うん。ありがとう。
じゃあ明日もううね。」

ポルトス 「……なあ。
これから21Cの教室に行かねえか?」

ダルタニアン 「え?」

ポルトス 「……最後に行っておきたい。」

ダルタニアン 「わかった。
職員室に鍵を置いてくるから先に行ってて。」

ポルトス 「おう。」

——パタン。

ポルトス 「……………」

……もう成就してるから必要ない、か。

……へへ。へへへへへへへへ。

へへへへへへ……

……って、もう変身しないんだよな。

なんか興奮するたびに一瞬、緊張するなあ。いまだに。」

—廊下。

—カツカツ。

ロシナンテ 「あ、ダルタニアンさん。
今まで銃士隊のお仕事ですか？」

ダルタニアン 「はい。
でも今、鍵を返しに行くところです。」

ロシナンテ 「……そうですか。
もう終わるんですね。
銃士隊もこの生徒であることも……」

ダルタニアン 「今までありがとうございました。」

ロシナンテ 「いえいえ。
では明日の卒業式、愛を込めて見送りますからね。」

ダルタニアン 「は、はい。」

ロシナンテ 「(呟き) 明日、ポルトス君の腕章もらえるかな……」

ダルタニアン 「……………」

— 2年C組の教室。

— パタン。

ダルタニアン 「鍵、返してきたよ。」

ポルトス 「おう。」

ダルタニアン 「……その席……」

ポルトス 「……後ろに座れ。」

ダルタニアン 「うん。」

— ガタン。

ダルタニアン 「……この席だったね。
ここに編入してきたとき……」



ポルトス

「席替え、したくなかったな……」

ダルタニアン

「え……？」

ポルトス

「あっ……な、なんでもねえよ。」

——ガタン。

ダルタニアン

「ちよっ……机に座らないでよ。」

ポルトス

「別にいいだろ。」

「遠くて声が聞こえねえ。」

ダルタニアン

「……二人しかいないのに」

ダルタニアン

「……ねえ、ポルトス。」

「ずっと一緒だったね。」

ポルトス

「3年は違うクラスだったぞ。」

ダルタニアン

「でも、生徒会室に行けばポルトスがいたし。」

ポルトス

「……そうだけだよ。」

ダルタニアン

「去年の創立祭は一緒に踊れて嬉しかったな。2年の時、踊れなかったから。」

ポルトス

「……………」

ダルタニアン

「ポルトスは初めてのダンスだったんだよね？何回も足を踏まれたもの。」

ポルトス

「……………」

ダルタニアン

「ふふっ。あの時の変なダンス、ボナシユーたちにまで笑われちゃって。」

——カタン。

ポルトス

「なあ、ダルタニアン！」

——キラーン。

ダルタニアン 「ど、どうしたの？
剣を抜いて……」

ポルトス 「私ポルトスはダルタニアンに永遠の愛を誓う！」

ダルタニアン 「え……？」

ポルトス 「なあ、結婚しよう？
……結婚だよ。結婚。
つたく、何回も言わせんな。」

ダルタニアン 「あっ……！」

——ガバッ。

ダルタニアン （……う、動けない）
ポルトス 「ちゃんとハッキリ言ってなかっただろ。
オレ、もう一瞬も離れていたくねえんだ。
あっ、こっち見んな！
……こ、このまま返事しろ。」

ダルタニアン （返事って……
腕で口が塞がれてるのに……！）

ポルトス 「オレ、今すぐお前と結婚したいんだ。
……で、その……
お前に似た子とオレに似た子が……欲しい。
……………（「ニヨニヨ……」）」

ダルタニアン 「ポ、ポルトス……
腕、少し離して……苦しいよ。」

ポルトス 「あ、ああ！ 悪いー！」

ダルタニアン 「……ポルトス。
私もずっとそばにいたいよ。
だから……返事はYES。
よろしく願います。」

ポルトス

「……………!!
ホントか? ホントだな!?!」

ダルタニアン 「うん。」

ポルトス

「じゃ、じゃあ、今の言葉忘れねえためにも
腕章、交換しようぜ!」

ダルタニアン

「……もつと違つものを交換しようよ。」

ポルトス

「違つもの? 何をだ?」

ダルタニアン

「この剣を……」

ポルトス

「でも、それ……親父の形見だろ。」

ダルタニアン

「だからこそだよ。」

私の一番大切な剣を
一番大切なポルトスに預ける。」

ポルトス

「……………!」

ダルタニアン

「ずっと一緒にいるんだから剣も一緒でしょ?
……えつ、どうしたの?」

ポルトス

「今の言葉……」

今の、すげえ嬉しかったんだよ!

……オレ、その剣でお前を一生守つてやる。

お前の親父がお前を守ったように

オレも絶対そうしたい。

そうしてやる!

……なあ、ダルタニアン。

オレたち、家族になるぞ!

いいな?」

ダルタニアン

「うん!」

ポルトス

「だから腕章も交換しろ。」

ダルタニアン

「……そ、それは……………」

ポルトス編終わり。